

第528号
令和7年

2月20日



すまいるたうん

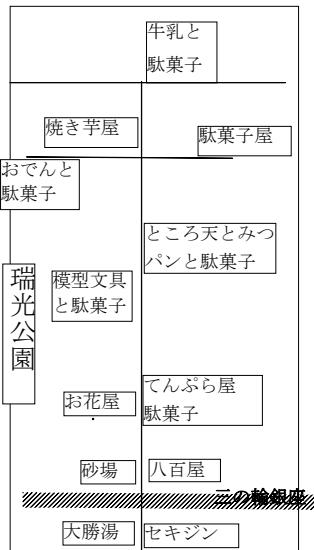


発行元
東京新聞
南千住専売店
TEL3803-1781
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

昭和30年代 三の輪銀座 松田進さんの記憶



三の輪銀座（ジヨイフル三の輪）が遊び場だつた松田進さん（昭和25年生）に子ども時代のお話を伺いました。



私が小学生の頃、昭和30～40年代、三の輪銀座にはスマートボールで遊べるところや、たくさんの駄菓子屋さんがありました。50円でお菓子やくじ引きの駄玩具などが買えました。その中で唯一、アイスクリームを売っていたお店、通称天ぷら屋さん（小林さん）のアイスクリームは甘物やさんの通常のアイスキャンデーではなく、マッチ箱を大きくしたサイズで経木で出来た入れ物に入つて、味はほんのり甘く、さっぱりしていておいしかったです。そして他にも模型と文具を扱っていました駄菓子屋さんがありました。模型といつても今のようなプラモデルではなく、ほとんどが木製で角を削つたりして作るのが大変でした。その前にも駄菓子屋があり、そこではところ天とみつパンが食べられました。みつパンとは食パン8切りくらいの厚さの食パン一枚を斜め三角にカットして串が刺してあり、その場で片面に蜜のような物を刷毛で塗つて

売っていました。

下校時間になると瑞光公園には紙芝居屋さんやおでんの屋台、粘土屋さんが来ています。粘土屋さんが来ると10円で粘土を買い、型にはめて、その上に金粉、銀粉など4色くらいから色を選んで塗りました。おめんや怪獣などの型でした。「もう採点するぞ」と粘土屋のおじさんが声をかけて品評会です。10点、100点とおじさんが点数をつけ厚紙の端切れに書いて渡していました。点数の低いのはおじさんが指でつぶして壊して回収していました。点数を集めると500点から型と交換してくれました。最高点は2800点か、3000点で大型の白馬童子の型がもらえるのです

が、点数が貯まつた頃にはいつものおじさんは来なくなり、別の粘土屋さんが来ます。そのたびに貯めた点数がバーになるので、皆で相談して点数表をまとめて渡して粘土の型をもらいました。

メンコ、ベーゴマ、チャーリング（輪っか、ビー玉のように投げる）でも遊んでいました。靴を履いたままローラースケートを商店街の道でやつていると「ローラースケートの鉄輪の音がうるさい。」



人によく怒られました。上映が終わるとそのフィルムを自転車の荷台にくくりつけて別の映画館に運んでいました。三ノ輪座は2階であり、赤胴鈴之助をよく見ました。日曜の朝一番の上映は子どもたちは無料だったと思います。マツダ文具店が三ノ輪座のチラシに広告を出していたので無料券をもらっていました。誰も行かない時には石原裕次郎や小林旭が出演する日活の映画も見にいきました。キネマハウスではターダンを、明治通りにあつた映画館ではゴジラをみました。鞍馬天狗や旗本退屈男をコツ通りの映画館で見ました。

商店街には色々な商売の方が歩いていました。時間帯によって街に流れる音は違いました。朝は豆腐屋さんや納豆屋さんがリヤカーを引いて回っていました。納豆工場が商店街を出て右側にあつたと思います。三角に包まれた経木を開いて中の納豆にパラパラと青海苔をふりかけてもらいました。「やかんにとおまき」と声を上げて回っていた人はやかんや鍋の穴をふさぐ仕事です。週何回か、夕飯後的小腹の空いた午後10時～0時にチャルメラの音を立てて夜鳴きそば屋さんが来ていました。私は持参のどんぶりにシナそば（ラーメン）を入れてもらい家で食べました。

子どもの歓声があふれ、下校時に子ども目当ての商いが始まる。大きな息づかいが街から聴こえていた時代でした。

